# 24［評論］『探偵小説の社会学』

［１］　『緋色の研究』（A Study in Scarlet）という作品は、それ自体一個の探偵小説にすぎないが、他面では①探偵小説一般の定義を与えるような探偵小説にもなっている。つまり、この作品はドイルの考える探偵小説という形式の宣言でもあった。事件に取り掛かったホームズが「探偵の仕事」についてワトソンに語る場面が印象的である。それは彼らが事件の捜査のあと、馬車に乗って下宿に引き返す途中のことである。

きみがいなかったら、ぼくは出かけてこなかったかもしれないし、こんな生まれてはじめての面白い研究を、危うく逸するところだった。そう、緋色の研究というやつをね。たまには、少々絵画的な表現を使ってもかまわんだろ？つまりいいかね、人生という無色の糸かせのなかに、殺人という緋色の糸が一本まじっていて、われわれの仕事はそいつを解きほぐし、引き抜いて、端から端まですっかり白日のもとにさらすことなんだ。

［２］　ここでホームズは探偵の仕事とはたんなるトリックの解明ではなく、殺人という緋色の糸が一筋そこから伸びてくる人間的な「動機」の解明にあると考えている。探偵は犯人の「過去」にまでさかのぼって事件を調べねばならない。そこには人間としての動機が宿っている社会学的な深さがあり、「緋色の研究」とはこの「深さ」の次元を探査することである。こうした考え方が成立するのは、世界には人間の動機が宿るような深さがあるにもかかわらず、その深さが十分に見えないような構造がひそんでいるからである。

［３］　『バスカヴィル家の犬』に見られるように、ごくありきたりにしか見えない人間がじつは思いがけない過去をもっている。バスカヴィル家の執事の正直な妻に、刑務所をａダツゴクした恐ろしい弟がいることを知って、ワトソンは次のようにいう。

サー・ヘンリもぼくも、びっくりして、この女を見た。この気がきかないほどまじめな女が、国じゅうにさわがれている犯罪人と血を分けているなど、あり得ることだろうか。

［４］　「緋色の研究」とは②世界の社会学的な深さを調べることであり、隣人たちの思いもかけない過去を知ることである。ホームズは事件のｂカギを握る兄妹の身元を調べることによって、彼らがじつは夫婦であったこと、そして兄と称する男はイングランド北部の学校で校長をしていたが、その後、妻を連れて雲隠れしたことをワトソンに教える。しかも、この男はバスカヴィル家の一族の一人であるのに、時間の壁の向こうで名前まで変えていたことが明かされる。大都市の群衆のあいだを行き交う人間だけでなく、田舎や田園に住みついている人びとの相貌にも③時間の壁に囲まれた意外な深さがひそんでいる。ここで探偵の方法は世界にひそむ深さや起伏を正しく測定することである。

［５］　この「緋色の研究」という構造は、『四つの署名』（一八九〇）、『バスカヴィル家の犬』（一九〇二）、『恐怖の谷』（一九一五）などホームズ物の長編に共通している。『緋色の研究』では、物語は二つの部分に分かたれる。前半は事件の現在を描いており、後半は過去の事実の解明になっている。現在は、その過去と「復讐」という緋色の糸によってつながっている。この小説で犯人は、殺人現場となった部屋の壁に、自分の血でドイツ語の「ＲＡＣＨＥ」（復讐）という文字を書き残すのである。もちろん「復讐」や怨恨や嫉妬だけでなく、世界の深さは「財産」というより一般化された欲望を宿していることもある。たとえば『バスカヴィル家の犬』の犯人は巨大な財産のｃチャクフクを狙っていた。だがこの場合も、その動機は外面的なものであって、そこには別の、深い過去（の宿命）が重なっていたわけであるが。

［６］　このように「緋色の研究」とは逆向きの推理をすることである。現在はそのままではｄナゾであり、何かを欠いて眠ったままであるといえよう。これに対して「緋色の研究」は、現在の事実に含まれる過去という深さの次元を探査する。それは過去の復元と想起のなかで現在の事実を、そして現在が欠いているものを目覚めさせる。その探求は現在の事実がもっている「時間的な深さ」にかかわっている。だが、この時間の壁の向こう側と現在とは直接に④有縁的な関係でつながっているわけではない。時間の壁の向こう側に到達するためには、現在それ自身の表面にたわむれている微視的な痕跡＝記号の群れを通過しなければならないのである。

［７］　「緋色の研究」においては、「時間的な深さ」（人間学的な深さ）とは異なるもう一つの深さの構造が交差している。すなわち、現在それ自身の表面に⑤恣意的な痕跡＝記号がたわむれており、それが別種の深さをつくりだしているのである。この微視的な痕跡＝記号のたわむれはギンズブルグが注目し、また探偵デュパンの手法が照準しようとしていたものである。取るに足りない細部、あるいは微視的な痕跡＝記号の群れが、角度を変えて見れば、何かを意味する水準があり、そこには事実それ自身の「空間的な深さ」（記号論的な深さ）が横たわっている。「緋色の研究」を成功させるには、事実の表面にはらまれているこの空間的な深さを通過しなければならない。

［８］　「緋色の研究」とは、①事実の表面にたわむれている微細な痕跡の記号論的な解読を通じてある「個人」の存在を復元し、②さらに「時間的な深さ」のなかに埋もれたその個人の動機にまで到達するという作業からなっている。それは事実の「記号論的な深さ」を事件の「人間学的な深さ」に統合し、何かを意味するものにすることである。「緋色の研究」は次のような二重の過程から構成されている。

（ａ）「個人」の存在やその同一性をある人間学的な深さにおいて同定すること。

（ｂ）それ自身は人間学的な意味の深さと結びつかず、ただ事件の表面にたわむれている微細な「痕跡」の布置を解読すること。

　ここで微細な「痕跡」の解読は、ある「個人」の存在を識別し、同定する作業に統合されねばならない。

［９］　しかしホームズ物でも、短編においては、世界の人間学的な深さを精密に、リアリティゆたかに探査するという手法を取ることはむつかしい。たとえば「ボール箱事件」（一八九三）という短編では、ホームズの推理はたしかに世界の人間学的あるいは社会学的な深さを測量して「緋色の研究」というｅテイサイをとるのだが、その興味の中心はむしろ世界の表面に浮かぶ微細な痕跡の記号論的な解読にあるといえよう。

［10］　⑥微細な痕跡の解読は世界の人間学的な深さを認識するための重要な補助線となるものだが、この種の短編では、むしろ細部にたいする解読の作業のほうがその作品を他のものと区別する重要なモティーフとなっている。すでに見たように、デュパンもこうした細部の重要性を『マリー・ロジェの怪事件』で強調していた。デュパンは事件の内面には関係ないようにみえる「傍系的で、付随的な要素」を重視すべきであると主張したが、コナン・ドイルはホームズを通じてそのような細部にたいする注視と分析をきわめて印象的な仕方で描くことに成功し、大きな人気を博すのである。

●出題校

上智大学

●語注

コナン・ドイル＝一八五九〜一九三〇。イギリスの小説家。『緋色の研究』『バスカヴィル家の犬』は彼の作品。

ホームズ＝ドイルの一連の小説に出てくる探偵。ワトソンはその同居人で、小説の語り手。

デュパン＝アメリカの詩人・小説家ポー（一八〇九〜一八四九）の小説に登場する探偵。

ギンズブルグ＝現代イタリアの歴史家。

執事＝身分・地位のある人の家などで家政や事務を監督し、とりしきる人。

雲隠れ＝行方がわからないように、姿を隠すこと。

照準＝ねらいを定めること。

同定＝あるものが、どういうものであるかを見定めること。

■覚えておきたい語句

□６逸する…………………にがす。のがす。

□８白日のもとにさらす…隠れていたことを、公にすること。

□12探査……………………探り調べること。

□24相貌……………………顔かたち。容貌。人相。

□30怨恨……………………うらみ。

□32チャクフク……………こっそりと自分の物とすること。

□39微視的…………………人の感覚では識別できないほど小さく細かい。

□41恣意……………………思いつくままの考え。思いのまま。自分勝手。

□44記号……………………一定の内容を示すための、文字・しるしの総称。

□53布置……………………物を適当に配置すること。また、そのありさま。

□60モティーフ……………創作の動機となった主要な思想。主題。テーマ。

□63注視……………………注意してじっと見つめること。注目。

□64博す……………………得る。

◆漢字　本文中の二重傍線部ａ〜ｅのカタカナを漢字に直せ。

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問１　傍線部①とはどのような探偵小説か。最も適当なものを次から選べ。（５点）

ア　トリックの解明にとどまらない探偵の仕事を一般的に示した探偵小説。

イ　探偵小説はこのような形式を取るべきだということを主張する探偵小説。

ウ　探偵小説とは本質的にこういうものだということを示している探偵小説。

エ　一般的な探偵小説の定義がなされている探偵小説。

オ　探偵本来のあるべき姿を典型的に示した探偵小説。

〔　　　〕

問２　傍線部②とはどういう意味か。最も適当なものを次から選べ。（５点）

ア　社会学のもつ奥深さ。

イ　社会学が探求している動機の隠れた深さ。

ウ　犯行の社会学的な意味の深さ。

エ　社会がもつ歴史的な深み。

オ　世界の目に見えない深さ。

〔　　　〕

問３　傍線部③とはどういう意味か。最も適当なものを次から選べ。（５点）

ア　新しい大都市ではなく、伝統的な田舎に見えない過去が秘められている。

イ　大都市の群衆のなかを行き交う見知らぬ他人よりも、隣人にこそ思いがけない秘密が隠されている。

ウ　世界にひそむ深さや起伏が壁のように解明を阻んで、その作業は想像以上に時間のかかるものとなる。

エ　現在と過去の間の時間の壁に隠されていて見えないが、そこに思いがけない事実がひそんでいる。

オ　長い時間の経過が壁のように立ちふさがって、事件に関わる人々の相貌を変えている。

〔　　　〕

問４　傍線部④「有縁的」とほぼ反対の意味で用いられている言葉を、本文中から漢字三字で抜き出せ。【読みのセオリー】（５点）

〔　　　　　　〕

問５　本文には次の一文が抜けている。それが入る直前の五文字を答えよ。(ただし句読点は含まない)（５点）

・そのような探査は一定量以上のヴォリュームを要求するからである。

〔　　　　　　　　　　〕

問６　傍線部⑤の説明として最も適当なものを次から選べ。（５点）

ア　表面にばらばらに散らばっているために、そこに一貫した意味を読み取ることが難しい記号。

イ　表面に存在しているのだが、取るに足らないように見えるためにその意味を見逃してしまう記号。

ウ　事件と直接関係がなく、表面でただたわむれているだけの記号。

エ　巧妙に隠されているためにその裏にあるものに気づくことが難しい記号。

オ　表面上事件と何のかかわりもないように見えて、実は重大なかかわりをもつ記号。

〔　　　〕

問７　傍線部⑥とあるが「重要な補助線となる」のはなぜか。その理由を五五字以内で答えよ。（10点）

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問８　本文の趣旨に合致しないものを次から二つ選べ。（５点×２）

ア　ドイルの探偵小説はたんなる犯行の動機を探るのではなく、その過去の思いがけない人間的事実を明らかにすることにある。

イ　ドイルの探偵小説は、一般的な欲望といった社会学的な動機ではなく、人間学的な深い動機を白日のもとにさらすことにある。

ウ　ドイルの探偵小説において、世界の人間学的な深さを認識することが重要だが、痕跡の解読はそのための重要な手段である。

エ　ドイルの探偵小説において、短編では微細な痕跡の解読を興味の中心とするものがある。

オ　ドイルの探偵小説は、時間の壁を効果的に用いることで、探偵小説を代表する作品になりえた。

〔　　　〕

【解答】

漢字　ａ脱獄　ｂ鍵　ｃ着服　ｄ謎　ｅ体裁

問１　ウ

問２　ウ

問３　エ

問４　傍系的（付随的）

問５　むつかしい

問６　イ

問７　微細な「痕跡」の解読が、ある「個人」の存在を識別・同定し、そのことで人間学的な深さの探査が可能となるから。（53字）

問８　イ・オ

【読みのセオリー】

★問題にこそヒントがある

　問４は「ほぼ反対の意味」を「漢字三字で」と問うている。答えは、漢字三字。なおかつ、「有縁的」の「ほぼ反対の意味」である。「反対」と言い切っていないことに注意する。問題の意図を丁寧に読み取ること。

【現代文読解用語200】

問　次の言葉の意味をそれぞれ後から選べ。

191シンパシー（　　）

192シンドローム（　　）

193ナルシシズム（　　）

194シニカル（　　）

195テーマ（　　）

196タブー（　　）

197パラグラフ（　　）

198フレーズ（　　）

199プロット（　　）

200ディテール（　　）

ア　症候群

イ　自己陶酔

ウ　共感

エ　皮肉な態度

オ　禁忌

カ　詳細・細部

キ　主題

ク　句・熟語

ケ　構想

コ　段落

【解答】

191ウ　192ア　193イ　194エ　195キ　196オ　197コ　198ク　199ケ　200カ

〔要　約〕

　［８］段落が全体をまとめる柱の段落であり、それがそのまま要約となる。

（ａ）（ｂ）の箇条書きがあるが、それだけではまとめとしては不十分である。第一文の①②の内容を合わせて要約とすることが求められる。

　　　　　　　↓

　「緋色の研究」とは、「時間的な深さ」に埋もれた個人の存在や同一性を人間的な深さに同定することと、表面にある微細な痕跡の記号論的な解読を通じて「個人」の存在を復元することを、統合することである。

（96字）

〈筆者＆出典〉内田隆三（うちだ・りゅうぞう）一九四九（昭和24）年大阪府生まれ。東京大学大学院総合文化研究科名誉教授。専攻は、社会理論、現代社会論専攻。著書に、『国土論』『社会学を学ぶ』など。二〇一四年、『ロジャー・アクロイドはなぜ殺される？』で本格ミステリ大賞（評論・研究部門）を受賞。本文は、『探偵小説の社会学』（岩波書店、二〇〇一年）より。

☆「セオラム　補充問題」問題は次の３種類があります。

　＊差し替え　　　……　当該の問と差し替えるもの

　＊追加　　　　　……　同じ問いで追加された問題

　＊新問　　　　　……　追加が可能な新たな問題

＊新問

問９　36行目「現在が欠いているものを目覚めさせる」とほぼ同じ内容を表すものをどれか、適当でないものを次より２つ選べ。

ア　表面にあらわれる取るに足らない痕跡から事件を解読すること。

イ　事件の現在はそのまままでは謎であり、過去を明らかにすることによって、現在に意味を与えること。

ウ　犯罪事件は現在に何かが欠けているから起こる。そのために過去の動機を探って、欠けているものを明らかにすること。

エ　逆向きの推理によって過去をたどり、それを現在に蘇らせること。

オ　過去を明らかにすることで、現在において見えなかったものを見えるようにすること。

［答］　ウ・オ

＊新問

問10　51行目「「個人」の存在やその同一性をある人間学的な深さにおいて同定すること」の説明として最適のものを次より選べ。

ア　個人の性格や人間性を手がかりに、社会との関わり方を明らかにすること。

イ　個人の存在を、他の多くの個人との目につきにくい性格の違いによって識別すること。

ウ　個人をその人間性という観点から明らかにすること。

エ　個人の社会におけるアイデンティティを深いレベルで突き止めること。

オ　個人の過去をたどって、その個人がどういう存在かを明らかにすること。

［答］　オ

＊（語彙）追加

⑧　ア　ケンメイな努力　（　　　）

　　イ　ケンメイな処置　（　　　）

［答］　ア懸命　イ賢明

■要約の方法　★本文を［１］〜［10］の形式段落で考える

［１］　『緋色の研究』は、探偵小説一般の定義を与えるような探偵小説だ。

［２］　探偵の仕事とは、殺人という緋色の糸が一筋そこから伸びてくる人間的な「動機」の解明にある。（［３］省略）

［４］　「緋色の研究」とは世界の社会学的な深さを調べることであり、隣人たちの思いもかけない過去を知ることである。（［５］省略）

［６］　「緋色の研究」とは逆向きの推理をすること。だが、時間の壁の向こう側に到達するには、現在それ自身の表面にたわむれている微視的な痕跡＝記号の群れを通過しなければならない。（［７］省略）

［８］　「緋色の研究」は、（ａ）「個人」の存在やその同一性をある人間学的な深さにおいて同定すること、（ｂ）事件の表面にたわむれている微細な「痕跡」の布置を解読すること、この二重の過程から構成されている。（［９］・［10］省略）

《段落相互の関係》　［１］段落（問題提示）［２］〜［５］段落（具体例）

［６］段落（まとめ）　　［７］段落（［６］段落の言い換え）

［８］段落（「緋色の研究」のまとめ）　［９］・［10］段落（補足）

■本文の要約■

「緋色の研究」とは、「個人」の存在やその同一性をある人間学的な深さにおいて同定すること。さらに、事件の表面にたわむれている微細な「痕跡」の布置を解読すること。このような二重の過程から構成されている。（99字）